

中央アジア研究者が学ぶ英領インド史
—比較研究のために—

北海道大学スラブ研究センター
宇山 智彦

はじめに

南アジア史研究との縁：

駒場で学部・大学院時代に参加した長崎ゼミ

学部時代に読んだ小谷汪之著『歴史の方法について』、『大地の子』

前者（インド史ではないが）の「異文化としての過去」という考え方に共感、アジアにおける文化的根無草状況＝「エセ文明性」という議論に影響を受ける

後者の、大衆ナショナリズムとエリート・ナショナリズム、地位上昇志向と正統主義と差別の複雑な関係をめぐる議論に刺激を受ける（のち、ソ連崩壊前後の民族問題を分析する際に、政治指導者・インテリ・大衆のナショナリズムの間の関係を論ずる）

なぜ中央アジアとインドを比較するか

内地と外地の区別が曖昧なロシア帝国の中で、中央アジアは最も植民地的性格の強い場所
イギリス帝国の中でインドは、非白人に対する統治体制が特に体系的に整備された場所

（大規模な白人入植地でも、利権の獲得や軍事支配にとどまる植民地でもない）

グレートゲームでロシアはインドに、イギリスは中央アジアに関心、同時代にも比較の議論
→英露の植民地・辺境の中で最も比較に適した対象

本報告のねらい：

英領インド史関連の本を読みながら感じた、ロシア領中央アジアとの違いと共通性を提示
→他の地域も含めた帝国比較・植民地比較の具体的な議論への貢献を意図

（なお個別研究のほか、概説として[狭間・長崎][メトカーフ, メトカーフ][粟屋]を利用)
比較研究は耳学問だけではできない。専門外の地域についての研究・文献を自分で読む必要

1. 植民地の形成過程と形態

進出の動機と経済体制：

イギリスは貿易・経済を中軸とした進出：17世紀にイギリス東インド会社がマドラス、ボンベイ、カルカッタに商館・要塞を設置。1757年のプラッシーの戦いでベンガル政治の実権を握って植民地化を開始。その後100年間にわたり、本来貿易会社である東インド会社が植民地統治を行う。政府による支配体制が確立してからも、インドから欧州大陸や米国への一次産品輸出と、イギリスからインドへの綿製品・機械製品などの輸入という貿易構造が植民地経営の根幹。

ロシアはどちらかといえば安全保障上の理由で中央アジア進出。併合・征服後は収奪よりも帝国内での自給的な経済体制の確立をめざした。税率は英領インドよりはるかに低く、ハン国時代より低い。クリミア戦争と米南北戦争で米国綿輸入が減ったことから中央アジアでの綿花栽培を促進、輸入綿には高関税かける。

国家体制：

インドは予算も軍も本国とは別（それゆえ軍の経費負担問題〔秋田〕が起きる）。500～600の多種多様な藩王国があり、直接統治と間接統治が入り乱れる。

中央アジアはロシアの国家体制・財政・軍事の一体性を前提としたうえでの実質上の独自性。財政面の位置づけではフィンランドや初期のポーランドの方がインドにやや近い。保護国はブハラとヒヴァのみで、基本的には直接統治（ただしブハラの存在は重要）。

2. 統治手法

協力者・インフォーマント：

イギリスは圧倒的多数のインド人を少数のイギリス人で支配するため、インド人協力者・インフォーマントを重視。インドは植民地化以前からコミュニケーション密度の高い社会で、ムガル期に発達した *harkara*（諜報員）や *munshi*（書記）による情報網をイギリスが利用し、さらに変化・発展させて現地情勢を把握。それでも「情報パニック」が時に起きる〔Bayly〕。

ロシアは中央アジアとの関係で通訳・媒介者として重要な役割を果たしていたタタール人を1860年代以降排除。しかし少数のロシア人では地方の事情を十分把握できず、しばしば誤った情報に翻弄され、現地民行政官（「生きた壁」「通り抜けられないカーテン」）やロシア式の教育を受けた知識人にさえ深い不信感を持つ。時には現地民行政官を飛び越えて「民衆の味方」を演出。

軍：

イギリスは大規模なインド軍を編成（忠誠と見られたシク教徒やネパール山岳民が中心）、イギリスの戦争のために世界各地に派遣。ただし南アフリカ戦争のように「白人の戦い」と見なされる場合は限定的にしか派遣せず〔秋田〕。

ロシアは中央アジア諸民族の忠誠を疑い徴兵せず。ただしヴォルガ・ウラルなどのムスリムは徴兵対象。中央アジアのトルクメン人志願兵による騎馬隊も編成、ヨーロッパ戦線で戦わせる（兵士としての適性や勇敢さを民族的特徴と見なす点は、英領インドでの *martial race* 観と類似）。

議会制・官僚制への現地人の参加：

イギリスは議会制・官僚制へのインド人の参加を消極的ながらも認める。1861年から立法参事会（総督の諮問機関）にインド人代表参加、92年から間接選挙。インド人エリートは高等文官への登用とイギリス議会での議席獲得を熱心に要求、1920年代には地方議会でインド人が多数を占める。イギリス本国の民主主義は、インド人がイギリスに対して行う権利要求の基準に。

ロシア領中央アジアでは現地民行政官は基本的に末端の行政のみを担う（郷長などの選挙制は腐敗生み混乱）。1906年に新設の国会（ドゥーマ）への選挙権を認めるが、翌年には剥奪（ロシアの議会自体歴史が浅く権限が小さい）。

3. 「伝統」と教育

「伝統」と有力者層の扱い：

イギリスは「伝統」重視。初代ベンガル総督ヘイスティングス（1772）「できる限り古代インド以来のインドの習慣と制度に従いつつ、われわれの法律をインド人の生活、社会、国家の諸問題に適用する」。本国が階級や伝統を重視する社会であったがゆえに、植民地でも階層構造や伝統を見出すことに熱心。華麗な儀式や叙勲などにより、インド人エリートをイギリス帝国の階層構造に組み込む。特に大反乱以降、現地有力者を十分に掌握していなかったことが反乱の背景にあると考えて藩王、大地主らを優遇 [キャナダイン]。

ロシア帝国では、貴族は国家を支える社会層であると同時に、専制体制の貫徹のために弱体化されるべき存在という二面性。中央アジアではカザフのスルタン（旧ハン家の人々）やクルグズのマナブ（秋山報告参照）に当初頼りながらも、より早い時期に併合されたヴォルガやカフカスなどの名望家と異なり、彼らを帝国の貴族社会に取り込むことはあまりしない（ただし褒賞の制度はそれなりに発達）。徐々に行政官（ロシア人、および選挙制による末端の現地民行政官）に役割を移す。現地の「伝統」への関心はイギリスほど強かったわけではないが、イスラーム法や慣習法を維持・再編して使った点は共通。

教育：

英領インドでは当初、サンスクリット語やペルシア語による古典教育を尊重し、追加的に西洋の知識を教えようというオリエンタリストの立場が主流。1830年代に、英語教育を最大限に行おうというアングリシストとの間で論争。結局、母語教育、英語教育、古典教育が併存 [Zastoupil & Moir]（ただし、高等教育の拡充の割に初等・大衆教育を軽視。特に大反乱後）。

ロシアはイスラーム教育に対しては放置と敵視の間で揺れる（古典教育自体インドほどの厚みはない）。ロシア式の教育は母語とロシア語の両方で行われ、民衆の教育も目標とされるが、実際の普及度は低い。

おわりに

英領インド史研究の厚みと多様性。特にイギリスでの研究蓄積が著しく、さまざまなアイデアを含む。インドがイギリス帝国形成の中核的存在であったことを反映（メトカーフは、イギリスの近代的習慣・制度のいくつかはインドで始まったと指摘）。インド人によっても、サバルタン、ジェンダーなどについて特色ある研究がなされている。

それに比べロシアでの中央アジア史研究は貧弱。ロシア帝国は多宗教・多民族ではあったが、結局はロシア人居住地の広大さが国力の基盤だった。中央アジア諸国での研究も、ソ連的な手法や民族主義、政治的制約により発展が不十分。近年はむしろ欧米人や日本人により研究の革新が進む。

植民地化に先立つ時代の国家・社会のあり方と、それに対する帝国側と現地社会の見方の重要性。イギリスはムガル帝国の後継者であることを示そうとし「伝統」を尊重したが [コーン]、ロシアはハン国期の徴税台帳などを技術的に利用することはあっても、諸ハン国自体やその伝統は低く評価。

全体として、英領インドとロシア領中央アジアは細かく見れば違いが目立つものの、ヨーロッパとは異質な文明を持つ社会を統治するために伝統や慣習をある程度尊重しながらもさまざまな改革・介入を行ったこと、現地人の民族性に関する擬似科学的なステレオタイプが形成されたことは共通（単なる軍事支配や白人入植との違い）。現地民側の協力・適応と抵抗の交錯も十分に比較可能。

現在、Morrison が両地域を精力的に比較研究。ただしイギリス統治をロシアより肯定的に見る論調は正しいか？

Curzon の評価：ロシアは非文明的だが、現地民の扱いがうまく中央アジアでは人気がある
イギリスのより効率的な統治が必ず良い結果をもたらしたわけではない
イギリス統治と印パ対立・パキスタンの混乱との関係をどう捉えるか

比較の難しさ：植民地時代の開始・終了の時期、長さの違い

ロシアは短期間に多くのことをやらなければならなかった（末期は帝国の混乱期と重なる）
ロシア帝国期と現在の関係を考える際には、帝国を反面教師としたソ連の政策の評価が重要

文献：

秋田茂『イギリス帝国とアジア国際秩序：ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』名古屋大学出版会、2003年。

栗屋利江『イギリス支配とインド社会（世界史リブレット 38）』山川出版社、1998年。

キャナダイン, D. (平田雅博、細川道久訳)『虚飾の帝国：オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ』

日本経済評論社、2004年。

小谷汪之『歴史の方法について』東京大学出版会、1985年。

小谷汪之『大地の子（新しい世界史 1）』東京大学出版会、1986年。

コーン, バーナード・S (多和田裕司訳)「ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象」エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編 (前川啓治ほか訳)『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992年。

狭間直樹、長崎暢子『自立へ向かうアジア（世界の歴史 27）』中央公論新社、1999年。

メトカーフ, バーバラ・D、メトカーフ, トーマス・R (河野肇訳)『インドの歴史（ケンブリッジ版世界各国史）』創土社、2006年。

Bayly, C.A., *Empire and Information: Intelligence Gathering and Social Communication in India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).

Curzon, George N., *Russia in Central Asia in 1889 and the Anglo-Russian Question* (London: Longmans, 1889).

Morrison, A.S., *Russian Rule in Samarkand 1868–1910: A Comparison with British India* (Oxford: Oxford University Press, 2008).

Zastoupil, Lynn, and Martin Moir, eds., *The Great Indian Education Debate: Documents Relating to the Orientalist-Anglicist Controversy, 1781–1843* (Richmond: Curzon, 1999).